

静岡県立大学訪問について

(Gary Whitby, オハイオ州立大学アメリカンランゲージプログラム所長代理, 吉村紀子訳)

今回の静岡県立大学訪問は、2007年12月に実施したSHEPの結果に基づいて意見を交換することが主たる目的であった。3週間に短縮された2007年の研修はいろいろな課題を残したこともあり、話し合いが必要であると考えた。

ミーティングにおいて、特に以下の点を説明した—私たちが提供するクラスは、参加者が明白で簡潔な英語で、また同じ専門の研修者は勿論、一般の人たちにも理解できるようなスタイルで、研究発表を行えるように企画されていること。特に、毎日のリーディング、ディスカッションの実践、発音練習、ディクテーションの実践、イントラアクティブな学習活動、プレゼンテーションの実施、プレゼンテーションの要約、チュートリアルがクラスでの主要な学習活動であること—。

また、今回の訪問では、私たちが長年に渡って培ってきた英語研修に関する知見を共有したいと考えた。例えば、研修期間についてであるが、質と同様に考慮すべきであることを強調したい。それから、事前準備は学習者の目標言語との接触時間をクラスでの学習や教授との面談といった観点から考えても重要であり、英語習得にとって不可欠である。「木を見て森を見ず」の比喩にあるように、研修の目的に即した学習が促進されるべきであり、テストスコアに極端に左右されないようにした方が望ましい。そして、学習者に助言したいことは、「郷にあっては郷に従え」のように、柔軟性を持って英語学習、異文化体験に対応してもらいたい。

プレゼンテーション学習については、声のコントロール、説明方法、スピーチ、日常会話、ジェスチャ、聴衆とのやり取り、等の指導が必要であると考えます。同時に、参加者と指導教員とのインターアクションも重要であるので、交渉・討議・質疑応答等を通して促進できるようにしたい。習熟度が異なる参加者のクラスでは、発見学習、グループ発音練習、OHP使用の誤り添削、インターネットの活用、ポッドキャストの利用等が役に立つと考えられる。